

六祖慧能禪師と文人との關係に就て

福 島 俊 翁

我が六祖慧能禪師の傳に就ては、宋の天壽寺の沙門通慧大師即ち贊寧等の撰した宋高僧傳卷八に纏められてゐる様であるが、これも其の材料は彼の六祖壇經や唐の文人王維、柳宗元、劉禹錫等の碑銘などに據るもの多く、果してどれ丈の信賴を與へ得るか、尙疑問の存する所である。此の他に法海の壇經略序(全唐文九一五卷)とか日本の傳教大師將來の曹溪大師別傳のやうな比較的古い文献もないではない。

●曹溪大師別傳一卷は寶曆十二年(西紀一七六二)金龍沙門敬雄の序と吾が妙心寺の祖芳の後跋を附して刊行され、今は續大藏經中にも收められてゐる。近頃胡適の研究する所によると、この別傳の出來たのは唐の建中二年(西紀七八一)で慧能禪師寂後六十八年目に當るといふことである。

又支那の正史である唐書の中には特に慧能禪師の傳はないが舊唐書の一九一卷の神秀の傳の中に慧能に及んだものがある。然しその内容は頗る簡單なものに過ぎない。

今吾人は如上の文献を播讀し、近頃何格恩なる人の嶺南學報所載の研究を參考し、六祖大師と關

聯せる當時の二三文人について一面の考察を敢てして見ようと思ふ。

贊寧等の高僧傳の成つたのは大體宋の端拱元年(西紀九八八)頃で慧能禪師の寂後凡そ二百七十五年後のものであるが、其中の慧能傳の終に

朝達名公所重。有若宋之間。謁能著長篇。有若張燕公說。寄香十斤拜詩。附武平一至。

詩云。大師捐世去。空留法身在。願寄無礙香。隨心到南海。武公因門人懷讓鑄巨鐘。爲撰

銘讚。宋之問書。次廣州節度宋璟來禮其塔。問弟子令韜無生法忍義。宋公聞法歡喜。向塔乞

示徵祥。須臾微香漸起。異香裊人。陰雨霏霏。只周一寺耳。稍多奇瑞。道繁不錄。

といふ事が記されてゐる。思ふに是等の事實は、壇經や文人所撰の碑銘にも見えざる所であるが、

高僧傳は如何なる根據よりして、この記事を傳へたであらうか。慧能禪師は曾て黃梅(廬州黃梅縣馮茂

山東禪寺)の弘忍禪師の處で道を得て南方嶺南に歸り、そこで禪風を興隆したのであつて、再び大庾

嶺を越えた事實がないやうである。それは高僧傳並に王維の碑文に、慧能禪師は武太后や孝和皇帝

から都に召された際、病を以て之を辭し

子牟之心。敢忘鳳闕。遠公之足。不過虎溪。

と言つてゐるのみならず、高僧傳或は舊唐書の神秀の傳にも、

初秀同學能禪師。與之德行相採。互得發揚。無私於道也。嘗奏天后。請追能赴都。能懇而固辭。秀又自作尺牘。序帝意徵之。終不能起。謂使者曰。吾形不揚。北土之人。見斯短陋。或不重法。又先師記吾以嶺南有緣。且不可違也。了不度大度嶺而終。

とある事からも考へられる。且壇經に記す所によれば、六祖は唐の高宗の儀鳳元年(西紀六七六)二月八日廣州法性寺で受戒し、次年の春寶林寺に歸り、先天二年(西紀七一三)七月八日新州に歸つて八月三日に示寂した様であつて、其の間凡そ三十七年は皆曹溪に在住し、終始大度嶺(即ち今の江西省大度縣南、廣東省南雄縣との接界)を逾えなかつたと見られるのである。然るに一方神秀禪師は、其の張説之撰する所の碑文にも言つてゐる如く、「兩京法主、三帝國師」として朝野の尊信を受け、北方に於ける禪宗の勢力は主として神秀の教權下に在つたらしく、我が慧能門下の神會の著といはれる南宗定是非論に由つて言ふも、神會は開元二十二年正月に河南の滑臺(一名白馬城、今の河南省滑縣治)の大雲寺に於て無遮大會なるものを開き、當時尤も勢力のあつた神秀門下の普寂大師が自ら禪門の第七祖と稱するの謬妄を排撃して、慧能禪師が眞傳の第六祖たることを指摘したといふ事である。蓋し此の事のあつたのは慧能禪師の寂後凡そ二十一年の頃であつて、恐らく其頃から北方人士の間に慧能一派の所謂南宗禪なるものが強く認識され、宗密の所謂

曹溪了義大播於洛陽。荷澤頓門派流於天下。(圓覺大疏鈔三)

と稱せらるゝに至つたのは實に玄宗の天寶四年(西紀七四五)頃の事であると思はれる。王維が神會の請によつて、慧能禪師の碑文を製作し、六祖の事迹が一層明白にせられたのも其後のことに屬するのである。總じて先天、開元年間には實は北宗禪の盛行した時代で、宗密の慧能神會略傳には

能大師滅後二十年中。曹溪頓旨沈廢於荆吳。嵩嶽漸門熾盛於秦洛。普寂禪師。秀弟子也。謬稱七祖。二京法主。三帝門師。朝臣歸崇。勅使監衛。英雄若是。誰敢當衝。嶺南宗途。甘從毀滅。と言ふ風であつたとするならば、先の宋高僧傳に記述せる如き、朝臣宋之問の參謁、張説の寄香、或は武平一の鐘銘、宋璟の禮塔の事實があつたと爲し得るであらうか。果して之ありとするならば我が慧能禪師は已に唐の朝廷に於ける名臣高官の間に敬重せられてゐた筈であつて、敢て神會の宣傳を俟つ迄もないかの様に思はれる譯である。

宋之問は唐の則天武后時代の有名の詩人で、武后に仕へ累轉して尙方監丞左奉宸内供奉といふ官に登つたが張易之に媚附した爲め、嶺南に貶せられた人である。此の宋之問の「自衡陽至韶州、謁能禪師」と題する詩が文苑英華(宋李昉等奉勅撰)卷二百十九卷に出てゐる。それは

謫居窺(宋之問集、唐詩作竊)炎壑。孤帆淼不繫。別家萬里餘。流目三春際。猿啼山館曉。虹飲江阜霽。湘岸竹泉幽。衡峯石困閉。(一作衡嶺石關閉)嶺嶂窮攀越。風濤極沿濟。吾師在韶(集作衡)陽。

欣此得躬詣。洗慮資空寂。焚香結精誓。願以有漏軀。聿(一作幸)薰無生慧。物用益冲曠。心源日閑細。伊我獲此途。遊道廻(一作悔)晚計。宗師信捨法。撰落文史藝。坐禪羅浮中。尋異窮(集作南)海裔。何辭禦魑魅。自可乘炎厲。回首望舊(一作故)鄉。雲林浩虧蔽。不作別離苦。歸期多年歲。

といふのであつて、即ち宋之間が朝廷より左遷され韶州に來つて慧能禪師に謁した時の詩と思はれるのである。然し此の詩の内容を精査し來るならば、吾人は先づ第一に地理的關係に於て一箇の疑問を挿まざるを得ない節がある様に思ふ。詩中の句には

坐禪羅浮中。尋異窮海裔。

とあるけれ共、慧能禪師傳の何れのものに就て見ても、師が曾て羅浮に在つたといふ事實を發見する事が出來ないのである。唐の李吉甫の撰にかゝる現存最古の地理書とも言はれる所の元和郡縣圖志(三十四)によると、羅浮山は循州に在る峻峰であり、且つ高僧傳(三集卷二十)の唐廣州羅浮山道行傳には、

見羅浮奇異。高三千丈。有七十石室。七十二長溪。仙人仙禽。玉樹朱草生於上。半入海中。行居於石室。默爾安禪。然或山精水怪。往往驚鳴。行視之蔑如也。

といふ如き記事もある程で、羅浮山は嶺表に於ける名勝地區である。尙、元和郡縣圖志(三十八)には

欽州安京縣北十里。亦有羅浮山。俗傳似循州羅浮山。因名之。

ともあるから羅浮なる地名は、欽州（今の廣東欽縣）或は循州に在る山であつて、曾て慧能禪師の足迹の及んだ場處として認むべく何等の文献をも見出せないのみならず、曹溪大師別傳に、慧能禪師が儀鳳元年二月八日に廣州法性寺に於て受戒した時、印宗法師は能大師に問うて曰く、「久しく何處に在つて住せしや」、大師云く、「韶州曲江縣南五十里。曹溪村故寶林寺なり」と、法師の講經が了つて僧俗三千餘人が大師を送つて曹溪に歸らしめたとなつて居り、師が最後に、先天二年七月八日新州に歸る迄は、曹溪を離れなかつたとするならば、詩中の「坐禪羅浮中」なる事實は頗る疑ふべきことに屬する。

又舊唐書百九十一卷の神秀傳の中には

弘忍卒後。慧能住韶州廣果寺。韶州山中舊多虎豹。一朝盡去。遠近驚嘆。咸歸伏焉。

と見え、慧能禪師が韶州の廣果寺に在つたことを傳へて居り、全唐詩卷三には「宋之間遊韶州廣果寺」
（一作果寺詩）

影殿臨丹壑。香臺隱翠霞。巢飛銜象鳥。砌蹋雨空花。寶鐸搖初霽。金池暎晚沙。莫愁歸路遠。門外有三車。

なる一首が錄されてゐる點から言ふならば、宋之間は慧能禪師に廣果寺或は廣界寺に於て謁したと

いふ事が想像出来るのである。然し此の廣果寺或は廣界寺は、實は靈鷲山に在つた寺で曹溪の寶林寺とは頗る遠く相隔つてゐる様である。蓋し慧能禪師は彼の壇經行由第一や傳燈錄などの記す所では、韶州刺史韋璩(一作璩)の請によつて城中の大梵寺の講堂で衆の爲に說法したといふ風なことは有るが、靈鷲山の廣果(界)寺に居たことは更に見えず、其の在否は頗る明證を缺く所である。

更に全唐詩卷四に「房融謫南海」、過始興廣勝寺果上人房。一作過韶州廣界寺」と題して

零落嗟殘命。蕭條託勝因。方燒三界火。遽洗六情塵。隔嶺天花發。凌空月殿新。誰令鄉國(一作故鄉)夢。終此學分身。

なる一詩が載せられ、又曲江縣志卷四にも之と同じ詩が「謫官過靈鷲山」といふ題で載つてゐる。こゝに言ふ房融は宋之問と同時に中宗の神龍元年(西紀七〇五)二月に流貶され、二人は相前後して嶺南に下り、韶州の廣界寺に遊び、其の見る所の人物も殆んど同じ様である。然りとせば、宋之問が廣界寺で謁したのは或はこの果上人であつたかも知れないのであつて、彼が慧能禪師を廣果寺(又は廣界寺)に訪うたといふことが、一層確實性を缺くことになるのである。

第二に吾人の疑問とする所は、前の宋之問の五言詩に於ける「流目三春際」といふ句に就てである。此の句から考へると、宋之問が衡陽(今の湖南省衡陽縣——陸路兩廣交通の要衝)から韶州に至り、慧能禪師に謁した時候は暮春であつたと思はれる。而して宋之問が嶺南に流謫されたのは前後二回あつ

て、その第一次は即ち神龍元年二月、張易之兄弟の問題に坐して、他の多くの朝臣即ち沈徐期、閻朝隱、王無競、杜審言等と共に貶せられ、彼は瀧州(今の廣東省羅定)參軍になつた時と、第二次即ち睿宗の景雲元年(西紀七二〇)に韋武に坐諂して欽州に流された時とであるが、彼の唐都長安から廣東の地に下つた行程に就ては史乘にその明文はない。けれ共宋之問が其の旅途に於て作つた所の詩凡そ十五首が全唐詩や宋之問集から見出されるから其の大體の道筋を想定する事が出来るのである。之に據れば、彼は道を江州(今江西九江)から洪州(今の江西、南昌)に取り、大庾嶺を過ぎ韶州(今の廣東、曲江)に入り清遠峽を経て廣州に下り、西江を溯つて端州(今の廣東、高要縣)から瀧州に入つたのが第一次の行程の様に思はれる。第二次流貶の際は全體荊州(今の湖北、江陵縣)から湘江に沿うて衡陽を過ぎ桂州(今の廣西桂林縣)に入り桂州を下つて梧州(今の廣西蒼梧縣)に至り、折れて東行して端州に至り、道を瀧州に取つて更に欽州に入つた様である。この第二回目の旅次に於ては八首の詩が見出される。而して第一次の行程に於て、黃梅から江州滿頭驛を過ぎた時は、恰度寒食の日に逢つたらしく、

途中寒食題黃梅臨江驛、寄崔融。

一作初到黃梅臨江驛

馬上逢寒食。愁中屬暮春。可憐江浦望。不見洛陽人。北極懷明主。南溟作逐臣。故園腸斷處。日夜柳條新。

と歌つてゐるのがある。陳垣の中國回日曆や二十史朔閏表による推定が誤らなければ、此年の清明節

(春分後十五日)は三月四日に當り、寒食(冬至後一百五日)は其の前日即ち三月三日に相當する事になる。そこで唐の李翱の來南錄によつて東京から廣州に至る道程、並に唐六典(三)による里程數から考へ來ると江州(黃梅臨江驛)から韶州迄の日數は凡そ三十二日位の計算になるから、宋之問の此の行に於て韶州到着は四月初旬に在りと思はれると同時に、途中の景物は勿論暮春に屬する譯である。然らば前の長詩に在る「流、目、三、春、際」の句は第一次の行程に於て歌つたものとしては決して事實を謬つたものでないことが肯かれる。が然しそれが今言ふ所の臨江驛から崔融に寄せた頃と同年でないならばその時候が一致せぬことになる。即ち此句が第二次南竄の際に通過した情景だつたとするならば大いに時間的の相違を想起させるものである。何となれば宋之問が第二次の路程では、湘江を涉つた時が秋であつて、「在荆州重赴嶺南」と題した詩に

夢、澤、三、秋、日。蒼梧一片雲。

てふ句があるからである。即ち上述の如く第二次の行路では、宋之問は湘江から衡陽を過ぎ桂州に入り梧州の方に下つたのであるか、此際假令彼が長途の跋涉を憚らずして樂昌瀧の方面から韶州に降り再び廣州から西江を溯つて梧州に入る如き迂路を辿つたとしても三秋の後に在つて、三春の際に及ぶ譯はないのであるから、第二次の道程では三春に逢ふといふ句の生れよう筈はないのである。然るに此の三春の際の句は所謂宋之問の前の長詩、「衡陽より韶州に至り能禪師に謁す」とい

ふ題下に歌はれた一句として傳つてゐるのである。而して此の衡陽から韶州に出た行路は宋之問流貶の第二次の行程である。然りとせばこゝに詩句に於いて時間的の矛盾がある事を發見するのである。

以上の如く宋之問が韶陽で慧能禪師に謁した題の詩には地理的即ち空間的にも時間的にも、内容的に検討を怠らぬならば大なる疑點の存することを知るのである。されば宋之問の集に能禪師に謁すてふ詩が傳へられてゐるてふ單なる事例から、宋之問と慧能禪師との關係を速斷することは聊か早計ではなからうかと思ふのである。況んや宋之問の詩には由來贋作が甚だ多いのであるが、或は之が故意の贋作に屬するものでないとしても、時に後の編輯家が誤つて他人の詩を取つて以てこゝに録したかも知れないのである。(張九齡の詩を宋之問集に入れてゐる例などもある)又或は好事家が僞託したかも知れぬのである。且つ宋之問といへば初唐で有名な文學の士であり、慧能禪師とは同時代の高官でもあつた所から、後の禪門の弟子が、かくの如き詩を見て、六祖大師と交渉のあつた様に端的に満足して、細察の暇もなく、慧能傳中に取り入れて仕舞つたのではなからうかとも考へ得られるものがある。

次に贊寧の高僧傳に所謂張説が武平一に附して慧能禪師に寄せた事になつてゐる五言詩は、全唐

詩にも出て居て

書一作答香能和尙塔

大師捐世去。空餘法力在。遠寄無礙香。心隨到南海。(卷四)

となつてゐる。(張説之集卷七にも載せられてゐる)ところが通鑑第二百七卷及び新唐書卷百二十五等の張説の傳によると、張説は長安三年九月丁酉に、武后の旨に忤いたといふ科で欽州に配流され、やがて中宗の神龍元年に召還されてゐるので、彼が嶺表に在任したのは凡そ三年である。曾て彼が慧能禪師と何等かの交渉があつたものとすれば、此の間に在つたのかも知れないが、別に之を證據だてる何ものもないのである。更に一面贊寧の高僧傳には神秀の高名を叙して

洎中宗孝和帝即位。尤加寵重。中書令張説嘗問法執弟子禮。

と言つて居るが、この神秀は神龍二年(西紀七〇六)二月二十八日に寂し、張説は師の爲に唐國師玉泉寺大通禪師碑文を撰して、

自菩提達摩天竺東來。以法傳惠可。可傳僧璨。璨傳道信。信傳弘忍。繼明重迹。相承五光。乃不遠遐阻。翻飛謁詣。……服勤六年。不捨晝夜。大師嘆曰。東山之法。盡在秀矣。(張説之集

一九。文苑英華八五六)

と書いてゐる。之に由つて見ても張説は神秀が弘忍の眞傳の法嗣であることを明證してゐる他に、

慧能禪師のことには一言も及んでゐないのである。即ち當時の人々の間には北宗禪の神秀の在ることに敬重を傾け、南宗禪に對してはさほどの注意を拂つてゐないことが想像される。又新唐書の武平一の傳には

武后時畏禍不敢與事。隱嵩山。修浮圖法。屢詔不應(卷一九)

と見え、神秀の寂後又武平一は使を奉じて嵩山に赴いた事があり、張説は之を送つて

送武員外郎中赴秀師嵩山塔下舍利(全唐詩四作送考功武員外學士使嵩山署舍利塔)

懷玉泉戀仁者。寂滅真心不可見。空留影塔嵩巖下。寶王四海轉千輪。金曇百粒送分身。山中二月娑羅會。虛唄遙遙愁思人。我念過去微塵劫。與子禪門同正法。雖在神仙蘭省間。常持清淨蓮華葉。來亦好去亦好。了觀車行馬不移。當見菩提離煩惱。(張説之集卷六)

と詠じてゐるのを見ても、張説と武平一とは同じく北宗禪の神秀の學徒であつて、南宗の慧能禪師との關係に就ては寧ろ疑ふべきではあるまいか。

加之新唐書の武平一の傳に於て

玄宗立。貶蘇州參軍。從金壇令。……開元末卒。(卷一九)

とあることから考へても、武平一は一生の間に嶺南の方に流貶された事實はない様であるし、又未だ曾て韶州の地方に使したといふことも無いのである。然らば張説は何故に香と詩とを武平一に託

して慧能禪師を弔敬することが出来たであらうか。大いに疑ふべきことであらう。

武平一は懷讓の巨鐘を鑄るに當り、之が銘讚を撰し、宋之問が其の文を書いたといふ高僧傳の記事に就いても亦頗る疑ふべき點があると思ふ。第一彼の巨鐘を鑄たことが慧能禪師の徳を尊信するの餘に出たものとするれば、その鑄造の時代は當に慧能在世の時とせなければならぬ。然るに宋之問は先天元年に死を貶處に賜つたことが正史に明記されて居るし、慧能禪師の示寂は先天二年八月といふことになつてゐる。高僧傳によれば、懷讓は慧能の寂後「衡嶽に躋り、觀音臺に止まり」、(三集卷九)頗る盛名を得た人であるが、慧能禪師在世時代は餘り顯はれてゐないのである。それであつて何故に武平一乃至宋之問等と相識つたであらうか。宋之問は已に欽州に流され、武平一は蘇州に貶せられてゐたに係らず、何故に態々煩勞を憚らずして其の銘文と書とを遠くに求めたのであるか。聊か信じ難いものがある様に思ふ。

又宋璟が曹溪に入つて慧能禪師の塔を禮したといふ高僧傳の記述にも疑問がないではない。佛祖通載(十六)に據ると此のことは開元四年(西紀七一六)丙辰に在つて、宋璟が廣州の都督に任ぜられたのが、開元三年である。(新唐書卷一二四、通鑑卷二二二、張說之集卷一八)そして次の年に玄宗は楊思勗をして馳驛して還るを迎へしめ、彼を刑部尙書に任命したことが、唐の封演の封氏聞見記卷九及び新唐書

宋璟傳によつて知られるのである。而して此際宋璟が曹溪に一遊したか否かは明證がない。或は彼が北方へ歸るの途次に立寄つた事にしても、塔に向つて徵祥を請ふなどいふ事は誠に奇怪千萬なことである。現存の壇經は守塔の沙門令韜の録したものと傳へらるゝが、此時の奇蹟は少しも記してはゐないのである。景德傳燈錄卷五の令韜の傳には

依六祖出家。未嘗離左右。而歸寂。遂爲衣塔主。唐開元四年玄宗聆其德風。詔令赴闕。師辭疾不起。

と記し、贊寧の高僧傳神會の條下には

開元八年。勅配住南陽龍興寺。績於洛陽。大行禪法。聲彩發揮。

といふことがあるよりせば、令韜への入闕の勅は神會が北上して南宗禪を宣傳するより少く以前で、兩京の間は夙に神秀を宗とし南宗派の聲譽は微々たる時であつたと思はれる。而して令韜は曹溪に迹を匿し聲をひそめてゐた間に、玄宗は那邊に其の德風を聆くことが出來たであらうか。疑はんとせば疑ひ得るのであつて、此の人に向つて宋璟が無生法忍の義を聞いたといふ高僧傳の記載も、或は後世の附會ではあるまいか。

之を要するに武平一、張說、宋璟等は文學功業に於て當時第一流の大家であつて、新唐書武平一の傳には「博學にして春秋に通じ、文辭を工にす、……既に謫せらるゝも名衰へず」と書かれ、舊

唐書に張説を傳して、「當時の榮龍、與に比を爲す莫し」と言ひ、宋璟の功業は新舊唐書の本傳や顏真卿の廣平文貞公神道碑銘に詳細に出てる如き、皆當代の名流であつたのである。此の中でも武平一と張説とは北宗禪の神秀とは密切な關係があつた所から、南宗派の方でも之と對抗する爲には、當時の名流と關係づけて其の宗師の教權を光大にする必要もあつたであらう。さうした對抗意識から便宜上種々の事象を捏造して巧に戯曲化する様になつたことが無いとも言はれない。彼の宋璟の如きは當時社會的には有力な人物であつたかも知れないけれ共、佛教とは頗る縁の薄い人であるに係らず、前述の様に慧能禪師と結びついて居るのである。

然るに慧能禪師と同時代の大臣で又詩人として有名な張九齡は慧能の居た曹溪に近い曲江の人であるが、不思議に南宗派の人々と雖も張九齡と慧能禪師との關係を語つてはゐないのである。蓋しそれには大いに理由がある。尤も張九齡の曲江集を讀んで見ても一字も慧能禪師には及んでゐないといふ事もあるが、この他に曲江集卷一〇に「答嚴給事書」といふ一篇があつて——此の嚴給事は僧義福に師事し、師の寂後に大智禪師碑銘を書いた所の嚴挺之のことで、張九齡が此の人に與へたものである、——それには

足下猶不諒此意。以爲汲汲於聲名。而乃約以莊生之言。博以東山之法。曉導精至。誠故人情。向之所防。有異來旨。彼二教者。忘情滅識。無有纏愛。故福至不喜。禍至不憂。今僕

養親。豈復割離恩愛。直指心於此地哉。

と書いてゐる。文中に言ふ東山の法といふのは高僧傳に由れば、道信と弘忍とが東山に住してゐたことより起つた名稱で、嚴挺之の大智禪師の碑銘にも、

自可璨信忍至大通。遞相印屬。大通之傳付者。河東普寂與禪師二人。卽東山繼德。七代於茲矣。と見ゆる通りである。之に依て彼を考へても張九齡が禪門に關心の無いことが餘りにも明白であるので、如何に曹溪の門流が權勢家の背景を近くに求めようとしても、張九齡と慧能禪師とを結び付けることは困難とせねばならなかつたであらう。之に反して張説や宋璟などになると、兎に角一時は南方に流遷せられた人物ではあり、且つ其間は不遇憂愁の人として、南宗の禪門に心を傾けたであらうことを想像せしむるの事情に置かれた所以も多いので、何時の頃からか慧能禪師との交渉が附會的に高僧傳に記録せらるゝに至つたのであらう。曲江縣志(十六)を見るに、明の劉應期の重建報恩光寺記なるものを引いて、

先是南人未嘗以相業顯者。韋公尊信壇經。時張氏奕世用科。九齡爲開元賢相。

といふ文が載せてある。蓋し慧能禪師も張九齡も同じく唐代の偉大な人物であるに相違ないけれども、慧能禪師の壇經と張九齡が賢相と成つたこととは直接に關係のある事ではないのであるが、後世の好事家は斯様に之を附會して報應の説を爲すといふ風になつてゐることも亦面白いと思ふ。